



技能を技術にして伝える

最近、製造業に限らずいろいろの技術分野で技能者の高齢化に伴う技能伝承の断絶が心配されている。これは年季を入れて先輩から技能を伝承しようとする若者が少ないためである。そこで「技能の技術化」が必要になる。

若いころ一緒に会社に入ったTさんは、工業高校出身でよく勉強していただけでなく、何をやらせても器用で字や絵もうまく、物を作ったり測定したり、それに報告書を書くのも上手だった。そばで観察してみると彼の仕事は決してぜんぶ丁寧ではなく、あんがい乱暴な動作も見える。しかし大事なところとそうでないところを区別していて、肝心のところは細心の注意で仕上げる。どうやら仕事にかかるまえに先を見越した段取りが考えてあるようだ。一度か二度失敗しないとわからない私などとはそこが違う。

つまり器用さの中身は手先だけでなく、むしろ理にかなったやり方にあるらしい。したがって、彼の器用さはある部分まで言葉で人に伝えることができるのであった。例えば荷物を作りながら「ひもを合わせてすぐしばらないで、もう1回からませてからしばるとよく締まりますよ」というふうに、仕事の要領を彼に教えてもらうことがよくあった。彼の表現は「野球のゴロを捕るときは帽子のてっぺんをキャッチャーに見えるようにして」というふうに、あくまで具体的ですぐ実行できるのだった。

このように個人に属すると思われる技能という漠然としたものも、分析してみれば言葉にして人に伝えられる部分もあるのである。もちろん技能の中には身体の熟練に関する部分もあり、すべてが言葉にできるわけではないから、教えてもらったからといってすぐに同じように上手にできるわけではない。しかし教え方が適切なら、ある水準までは短時

間で達することができる。

私が若いころ入っていた合唱団の指揮者のSさんは有名な作曲家でもあったが、練習のときの指示は「もっと豊かに」とか「堂々と」とか妙に情緒的で、具体的に何をすればよいのか、団員は内心「ン??」だった。ところがあるとき芥川也寸志さんに指導してもらった機会があった。彼の指示は「ここは半音符だからもっと短く」とか「いまの音は半音の半分くらい高かったから下げなさい」など、的確で、われわれ素人でも何をすればよいかすぐにわかる。本当の一流とはこういう人ではないか、とそのとき思ったものである。

昔の職人は口が重いから弟子は師匠の仕事を見て技能を盗むほかなかった。師匠もそれを黙認する。なんとも効率の悪い伝承法である。秘伝を守るにはよい方法かもしれないが、技術が進歩すれば古い技能の多くはいずれ不要になる。

技能のできるだけ多くの部分を的確な言葉や数値に表す。それによって技能は技術となり、公開され、人に伝えることも可能になる。考えてみればこれは技能者教育の指導者がふだん実行していることにほかならない。しかし指導者だけでなく、これからの時代の尊敬される技能者というのは、自分自身つねに技能を技術にする努力をする人、といってよいのではないだろうか。公開で技能が目減りするのを恐れる必要は全くない。次々と新たに学ぶべき技術や技能が生まれてくるのだから。

にいやま えいすけ

略歴 1956年 東京大学工学部冶金学科卒
1961年 日立研究所勤務
1987年 東北大学工学部教授
1997年 現職